

「神の国々の民」

マルコの福音書 1:43~45

はじめに

イエシュアの前に一人の病人が近づいて来ました。その人の病はツアラアトと言い、「重い皮膚病」とも訳されますが、実際には人体だけでなく材木や壁、石や土などにも発生する、病というよりは「汚染、汚れ」と呼ぶ方が相応しく、これに感染した者は社会から追い出され、隔離されるほどの病でした。そんなツアラアトに冒されたその人を、イエシュアは「深くあわれみ、手を伸ばして彼にさわり『わたしの心だ。きよくなれ』(マルコ 1:41)」と言って癒されました。ツアラアトは完全に消え、その人はきよめられました。しかしこの出来事は、確かに癒しの奇蹟としてだけでも特筆すべきことですが、神はこの出来事の中に、旧約聖書に記された数々のイスラエルの回復、再建の約束の預言を「型」として表し、そしてそれがイエシュアによって成し遂げられるという神の御計画であることが指し示されていると前回のメッセージで述べました。今日はその続きで、イエシュアはそのツアラアトが癒された、イエシュアによってきよくなったその人に、あることをお命じになります。

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:43 イエスは彼を厳しく戒めて、すぐに立ち去らせた。

1. 厳しく戒めて

イエシュアは「彼を厳しく戒めて」とあります。ここで「厳しく戒めて」という箇所で行われているヘブル語は、ガーアル(גָּאַר)「叱る、腐る、汚す」という意味の動詞ですが、その本来の意味は、聖書で最初にガーアルが使われた創世記 37:10 にあると考えられます。

【新改訳 2017】

創世記

37:9 再びヨセフは別の夢を見て、それを兄たちに話した。彼は、「また夢を見ました。見ると、太陽と月と十一の星が私を伏し拝んでいました」と言った。

37:10 ヨセフが父や兄たちに話すと、父は彼を叱って言った。「いったい何なのだ、おまえの見た夢は。私や、おまえの母さん、兄さんたちが、おまえのところに進み出て、地に伏しておまえを拝むというのか。」

37:11 兄たちは彼をねたんだが、父はこのことを心にとどめていた。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブの 11 番目の息子ヨセフが夢を見たことについての出来事です。ここで父であるヤコブがヨセフを「叱って」と記されているのが聖書で最初のガーアルです。内容的には、うめぼれた、身の程知らずの発言をする息子を父が叱るというものです。ここでヤコブはヨセフを「叱って」はいても、ヨセフが見た夢について「このことを心にとどめていた」とあります。ここには「言葉」という意味の名詞ダーヴァール(דָּבָר)と「守る」という意味の動詞シャーマル(שָׁמַר)が使われ、直訳では「この言葉を守った」となります。

創世記 37:10 「叱って言った」

↓

37:11 「このことを心にとどめていた」 = (直訳)「この言葉を守った」

このように、ガーアル「叱る」とは本来、「このこと」すなわちヨセフが見た夢を「心にとどめる」ことを指し示していると考えられます。その夢とは、後に起こることを神がヨセフに示したものでしたので神の御計画とも言えます。そしてそれは創世記 42 章でヨセフがエジプトを支配するようになり、彼の兄弟たちが、彼の前にひれ伏した時に現実となりましたが、しかしそれもあくまで「型」にすぎず、この夢は、究極的には以下の御言葉のような出来事を指し示すと考えられます。

【新改訳 2017】

ピリピ人への手紙

2:9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。

2:10 それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが膝をかがめ、

2:11 すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。

すべてのものがイエシュアの御前にひれ伏すこと、すなわちイエシュアを王とする神の国が建て上げられ、その支配が天と地と地の下にまで及ぶことを指し示していると考えられます。なぜならこれが神の御計画の完成、神の見ておられる夢の実現であると考えられるからです。ですからガーアル「叱る」という言葉のもつ本来の意味は、神の御計画を「心にとどめる」、心にとどめさせることを指し示し、その御計画についての「御言葉を守る」、守らせることを指し示していると考えられます。そして前回お伝えしましたが、このツアラアトに冒され、そしてイエシュアによってきよめられた人が、アブラハムの子孫であるイスラエルの民、ユダヤ人を指し示した「型」であると捉えるならば、イエシュアがこの人をガーアル「厳しく戒めて」と記されたその中には、イスラエルの民がイエシュアの王国の民として集められ、国が再建され、かつては神に逆らい、偶像礼拝に走った彼らが、イエシュアを通して語られる、「神の『御言葉を守る』」「心にとどめる」民とされる、変えられることが神の御計画の完成の中心であり、これと密接な結びつきがあることが指し示されていると考えられます。

2. 立ち去らせた

そしてイエシュアは彼を厳しく戒めた後、「すぐに立ち去らせた」とあります。ヤーツァー(אָצַר)「出て行く、出て来る」という意味の動詞がここに使われていますが、その最初の言及では以下のような意味で使われていました。

【新改訳 2017】

創世記

1:11 神は仰せられた。「地は植物を、種のできる草や、種の入った実を結ぶ果樹を、種類ごとに地の上に芽生えさせよ。」すると、そのようになった。

1:12 地は植物を、すなわち、種のできる草を種類ごとに、また種の入った実を結ぶ木を種類ごとに生じさせた。神はそれを良しと見られた。

1:13 夕があり、朝があった。第三日。

これは神の天地創造の御業の第三日、地に草木などの植物を芽生えさせた出来事ですが、ここで「(地は…) 生じさせた」と訳されているのが聖書で最初のヤーツァーです。この創世記 1:12 では「種、子孫」を意味する名詞ゼラ(זֶרָא)と、「種類」を意味する名詞ミーン(מִינִי)がそれぞれ二回ずつ使われており、「生じさせ」ること、ヤーツァーとは本来、種類ごとに子孫が増える、増殖ことを意味していると考えられます。これを人に当てはめると、民族、部族がそれぞれ祝福され繁栄するという意味になります。ですからイエシュアがツァラアトをきよめた人を「すぐに立ち去らせた」という出来事の中に、イスラエルによって地上のすべての部族、民族が祝福されるという、神がアブラハムとその子孫に約束された以下の御言葉の成就が指し示されていると考えられます。

【新改訳 2017】

創世記

12:1 【主】はアブラムに言われた。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。

12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。

12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」

「(地のすべての) 部族」、これをヘブル語でミシュパーハー(מִשְׁפָּחָה)と言い、本来は「種類」を意味する言葉です。ですから神は「地のすべての部族」の中から、アブラハムとその子孫であるイスラエルの民を選び分け、彼らによって「種類」にしたがって、すなわち民族、部族ごとに祝福するという世界、一つの国を造る御計画をお持ちであると考えられます。このように神という御方は、すべてにおいて種類ごと、部族ごとに「分けること、区別すること」にこだわられる御方であることがわかります。ですから神の御計画の完成である「神の国」とは、非常に調和の取れた、秩序正しい世界であると言え

ます。しかしそれは今日の世界とはまったくかけ離れたものではないと考えられます。なぜなら今日の社会、また自然界にも確かに秩序と調和が存在し、それが保たれている環境には平和が見られるからです。しかし人の罪がこれを乱すのです。人は罪によって神から離れてしまったために、自分の居るべき場所、あるべき状態、つまり神が自分を造られた目的を見失ってしまいました。だから人は不安になり、恐れ、悩むのです。また人は自分勝手に生きる者となってしまいました。だから人は妬んだり、自分の思い通りにならないと怒ったり嘆いたりするのです。神はそんな人の中から罪を取り除き、居るべき場所、生きる目的を与えようとしておられるのです。なぜなら神がそれぞれ目的をもって人を造られたからです。それは以下のように記されている通りです。

【新改訳 2017】

エペソ人への手紙

2:10 実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。

ですから「神の国」とは、イエシュアによってその人が造られた目的に相応しい場所に置かれ、同じくその人に相応しい、成すべき「良い行い」、その人それぞれに最適な働きが与えられる環境であると言えます。それが「すぐに立ち去らせた」と訳された、ヤーツァーの本来の意味が指し示す「神の国」の祝福であると考えられます。そしてその祝福とは、何度も述べているように、イスラエルによって祝福されるものです。このアブラハムの子孫であるイスラエルの民によって祝福される（創世記 12:3）とは、具体的にどういう意味であるのか、それが次の節の中に指し示されていると考えられます。

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:44 そのとき彼にこう言われた。「だれにも何も話さないように気をつけなさい。ただ行って、自分を祭司に見せなさい。そして、人々への証しのために、モーセが命じた物をもって、あなたのきよめのささげ物をしなさい。」

3. モーセが命じた物

ツアラアトがきよめられたかどうかの判断は、祭司の確認が必須となっていました。そしてその時に行わなければならないこと、「モーセが命じた物」すなわちモーセを通して神がイスラエルの民に与えられた律法によって、非常に細かな規定が定められており、レビ記 14 章にそれが記されています。ですから創世記 12:3 で約束された「地のすべての部族は、あなた（イスラエルの民）によって祝福される。」とは、地上のすべての部族もまた律法に従って生きようになるといことだと考えられます。」今日の世界は、民族や国によって法律が異なり、様々な法が存在し、ある国では罪に問われることが別の国では無罪であったりします。それが国家間の意見の相違、争いの原因となることもしばしばです。神の御計画の完成である「神の国」では、それがすべてこのイスラエルに与えられた律法に統一されると考えられます。つまりモーセを通してイスラエルに与えられた律法が、イスラエルだけでなく、

全世界共通の法として「言い広められる」ということです。それが次の節の出来事に「型」として表されていると考えられます。

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:45 ところが、彼は出て行ってふれ回り、この出来事を言い広め始めた。そのため、イエスはもはや表立って町に入ることができず、町の外の寂しいところにおられた。しかし、人々はいたるところからイエスのもとにやって来た。

イエシュアによってツアラアトをきよめられたこの人は、神が再建、回復されるイスラエルに対する約束の成就だと述べました。その人が「この出来事を言い広め始めた。」とあります。「神の国」では、このイスラエルの律法が世界中に広がり、世界共通の法となることが表されていると考えられます。

4. 寂しいところ

そしてイエシュアは「寂しいところにおられた。」とあります。この「寂しいところ」ヘブル語でホルバー(הַרְבָּוָה)という言葉が指し示す意味については以前お伝えしましたが、もう一度述べます。

【新改訳 2017】

レビ記

26:31 わたしはあなたがたの町々を廃墟とし、あなたがたの聖所を荒れ果てさせる。わたしはあなたがたの芳ばしい香りをかぐことはしない。

このレビ記 26 章は「あなたがたは自分のために偶像を造ってはならない…それを拝んではならない。(レビ記 26:1)」という偶像礼拝の罪について記された箇所です。そしてこの罪を行うならば、神は「(わたしはあなたがたの町々を) 廃墟とし」という箇所に聖書で最初のホルバーがあります。このようにホルバーとは本来、偶像礼拝の罪を犯したイスラエルの民の「町々、聖所」、すなわち国家としてのイスラエルが滅ぼされてしまうことを指し示していることがわかります。しかしこのレビ記 26:31 の後にはこのような続きがあります。

【新改訳 2017】

レビ記

26:42 わたしはヤコブとのわたしの契約を思い起こす。またイサクとのわたしの契約を、さらにはアブラハムとのわたしの契約をも思い起こす。わたしはその地を思い起こす。

26:44 …わたしは彼らを退けず、彼らを嫌って絶ち滅ぼさず、彼らとのわたしの契約を破ることはない。わたしが彼らの神、【主】だからである。

26:45 わたしは彼らのために、彼らの父祖たちと結んだ契約を思い起こす。わたしは彼らを国々の目の前で、彼らの神となるためにエジプトの地から導き出したのだ。わたしは【主】である。」

このように、「寂しいところ」ホルバーの最初の言及であるレビ記 26 章は、偶像礼拝の罪によって滅びてしまうイスラエルを指し示しているのではなく、そのイスラエルの先祖であるアブラハム、イサク、ヤコブに与えられた契約を神が「思い起こす」こと、つまり

【新改訳 2017】

創世記

12:1 【主】はアブラムに言われた。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。

12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。

12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」

というこの契約を決して忘れることなく、一つも違わず必ず成就される、成し遂げられることが指し示されていると考えられます。ですから、この神の契約を覚え、イエシュアがそれを成し遂げる御方であることを指し示すために、イエシュアは敢えてこの「寂しいところ」ホルバーに行かれたのだと考えられます。

5. すべての国々

そしてその契約の成就によってイスラエルはイエシュアを王とする神の王国として再建され、そこに「地上のすべての部族」全世界の国々が集まって来ることが、次の「人々はいたるところからイエスのもとにやって来た。」という出来事の中に「型」として表されていると考えられます。それは以下のようにも預言されています。

【新改訳 2017】

イザヤ書

2:2 終わりの日に、【主】の家の山は山々の頂に堅く立ち、もろもろの丘より高くそびえ立つ。そこにすべての国々が流れて来る。

2:3 多くの民族が来て言う。「さあ、【主】の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を私たちに教えてくださる。私たちはその道筋を進もう。」それは、シオンからみおしえが、エルサレムから【主】のことばが出るからだ。

「すべての国々」が「主のことば」であるイスラエルに与えられた律法に従って歩むようになるのが神の御計画の完成である「神の国」です。この解釈はモーセ五書（創世記、出エジプト記、レビ記、民

数記、申命記)に記された十戒を始めとする数々の掟を、「神の国」の民となった者はみな落ち度なく踏み行なうようになることを指し示します。これが世で一般的に言われている天国と、この「神の国」の大きな違いです。「神の国」は律法を遵守する規律正しい国民の集まりです。それはダビデの時代に組織された、幕屋(神殿)に仕える祭司たちにたとえられる、まさに「祭司の王国」です。そこに生きるすべての人にそれぞれ与えられる持ち場と立場があり、それを行うべく活かされる世界なのです。決して何もすることがなくて暇を持て余すことも、また自分勝手にやりたいことをやりたいだけするような世界ではないのです。

しかしそのようなことを聞くと、多くの人「神の国」は「自由がない、楽しくない」と思うことでしょう。しかしそもそも自由とは何でしょうか?想像してみてください。すべての人が自由に、つまり自分の好き勝手に、わがまま放題に生きたとしたら、そこはどんな世界になると思いますか?それはきっと互いに奪い合い、殺し合う世界になることでしょう。ですから自由とは必ずしも人を幸福にするものではないのです。また人はどんな時に楽しいと感じるのでしょうか?ある人は歌うこと、ある人は本を読むこと、またある人は身体を動かすこと、勉強や仕事が楽しいと言う人もいます。このように楽しみは人それぞれ違ってきます。なぜ違うのでしょうか。それは神がそのように一人ひとりを造られたからです。ですから神は当然一人ひとりが、何が好きで、何に向いているか、何を得意とするかをよくご存じです。ですから「神の国」の民は人それぞれに最も適した環境と役割が与えられる世界であり、自分に最も相応しい人生を生きる喜びと、楽しみを味わうことができる場所であると言えます。ですから「神の国」は一つの民、一つの法に基づく国家という形を持ちつつも、イスラエル、そして「すべての『国々』」という区別のある表現もなされ、また先に述べたように本来は「種類」という意味のミシュパーハーが「地のすべての部族」となっているように、「神の国」の民は一人ひとりが神によって、イエシュアによってそれぞれ特別に扱われる国であると考えられます。ですから私たちは「神の国」を求めべきです。なぜならそこには私たち一人ひとりにぴったりの環境と役割、私という人が最も活かされる人生が用意されているからです。御国が来ますように。